会議概要

園田英弘（国際日本文化研究センター）
SONODA Hidehiro

京都の国際日本文化研究センター（通称・日文研）で、大規模な日本研究の国際集会を開催しようというプランが提案されたのは、もう３年ほど前のことだった。海外から研究者を招待するといっても、それは300人のことなのか100人のことなのか。また、そのような大規模な集会を開くといっても、それに対処できる組織能力が日文研側にあるのか。不安はいっぱいあったが、「開くべし」という積極派が、消極派の意見を取り込むかたちで、招待者100人規模の国際集会開催のプランづくりが始まった。

目的は、「世界の日本研究者が一堂に会して、日本研究についての国際的な意見交換を行い、それとともに、日本研究者相互の直接的な人的交流をはかる」（「京都会議趣旨」より）ことにあるとされ、「日本研究・京都会議」（以下、「会議」と略する）は、国際交流基金と日文研の共催で開かれることになった。

「会議」をどのような規模にするかについては、よく考えてみると、重要な問題が含まれている。それは「日本研究」というのは誰のための、また何のための研究かという問題である。見方を変えれば、それは、「日本研究」に日本（とくに日本の国家を背景としている組織）がどれほど関与すべきかということである。私はあまり大きな関与をすべきではないという立場から、小規模の「会議」を主張した。

「会議」の日程は1994年の10月17日から、同月22日までと決まり、この間に300余の研究発表がなされることになった。「会議」へは、世界の約45カ国から約120人が招待され、また国内からの参加者は約420人（このうち70人は日本国内在住の外国人日本研究者）の多きにおよんだ。このような「会議」が可能になった背景には、世界各地でなされている日本研究の質的深まりと、量的拡大があることはあらためて指摘するまでもないだろう。

大江健三郎氏きたる

「会議」の第一日目は、公開講演会であった。講演予定者の一人の大江健三郎氏が、予定されていた講演の数日前に、今年のノーベル文学賞に決まったというニュースが流されたために、日文研の電話は、今からでも講演を聞けるかという問い合わせで鳴りっぱなしになった。また、講演会の日は大勢のマスコミ関係者がおしよせたために、大江氏は日文研の裏からこっそりと入場するはめになってしまった。

講演の「世界文学は日本文学たりうるか」は、外国の文学を消化して日本語で文学を書いていることの限界と可能性を模索したもので、「世界言語」についての話はいささか難解の気があった。もう一人の講演者、マリウス・ジャンセン氏の「日本とその世界」は、日本、東アジアの鎖国について多角的に論じたもので、非常に興味深い内容のものであった。

研究発表あれこれ

「会議」の二日目から、本格的な研究発表が始まった。この「会議」全体の構成は性格の異なるものが入り混じっており、研究発表は大きく分けて、四つのタイプのものに分類することができる。

第一は、国際公募によって選ばれたシンポジウムで、シンポジウムのテーマや規模や参加者などは、応募者自身が決めたものである（表１）。一方、これに対して、日文研の共同研究を母体にして企画されたシンポジウムがある（表２）。

以上の二種類のシンポジウムに対して、個人ベースの研究発表を国際公募したものがある。このタイプの研究発表は、テーマの類似性などによりいくつかにグルーピングして、報告をしてもらった。通常、学会などでは、このような研究発表が多くの部会を占めるのだが、今回の「会議」は学会ではないので、個人研究の発表の部分は少なめにおさえられたのである。

今回のこの部分の研究発表では、各国の日本研究の現状、日本の美術、建築、農業問題、地方史、現代日本文学、日本の国際化、日本観、日本文化分析の方法論、日本のマスコミ、宗教、祭礼、演劇など、実に多様な報告がなされた。個々の論文のコメントをする余裕はないが、水準の高いものが多かったということだけはここで指摘しておきたい。

最後に四番目のタイプとして、国際交流基金が、独自の観点から組織したもの（表３）を含め、「会議」は学会風でもあり、また大型シンポジウムのシリーズのようでもあった。「会議」は日文研内の七つの会場で同時平行的に行われたので、聞きたいものが、二つ三つとダブッてしまい、参加者の間から不満も聞かれたが、日程の都合上いたしかたなかった。

私自身も、フルに参加できたのは、公募された個人研究の発表会一つと、濱口惠俊氏が組織したシンポジウム、「日本は本当に異質・特殊か？――日本研究パラダイムの再検討」だけであった。この二つのセッションの議長の役割をしなければならなかったからである。65のセッションは、普通の学会でも通常よく見かけるように、聴衆が４～５人のものから、200人近くのものまでさまざまであったが、最も多くの聴衆を集めることができたのが、この濱口氏のシンポジウムであった。彼は開催主旨の中で「討議課題」として次の四点を指摘した。

１、日本社会の編成原理や運用原則が、世界的に見て果たして異質・特殊なのかどうか。もしそうだとすると、その根拠は何か。あるいはまたその反対に、日本文明が機能上、どの側面において普遍性を保ちうるか。またそのフィーザビリティは何に由来するか。

２、日本の政治経済システムの特質がどこまで東アジアの諸国と共通であり、またどの程度欧米のシステムと対照的か。東アジア型資本主義の特性は何か。またその将来性は？

３、日本の社会・文化システムを従来のように「集団主義」といったキーワードによって特殊視するのではなく、人類文明の一つの普遍形態として把握するには、どのような社会科学上のパラダイムが必要か。

４、世界におけるグローバリゼーションの円滑な進展にとって、何が必要な機能要件となるか。その際、日本型システムはどのようなメリット（機能的意義）とデメリットを持つのか。

５、サミュエル・ハンチントンの言うような文明間の衝突が今後不可避なのか、それとも「文化」を負荷しない形で「文明」を把握し、民族問題や言語間葛藤の問題にうまく対処し、グローバ

ル・ソサィアティを構築しうるのかどうか。

1の問題に関して報告者の榊原英資（大蔵省財政金融研究所所長）は、プロテスタント倫理と比肩し得るようなサムライ＝サラリーマンの禁欲精神による産業化が注目されるべきであって、そうした社会編成のほうが、歴史の浅いアメリカよりも普遍性を持ちうるとした。また岩田龍子（九州大学経済学部）は、日本的経営システムのほうが、組織化の機能が優れているために普遍的であるとした。中谷巌（一橋大学商学部）は、各国の経済発展のありようによってそれぞれ特徴があるので、一概に異質・特殊という結論は出しにくいとした。

リビジョニストの代表的論客といわれているチャーマーズ・ジョンソン（カリフォルニア大学）は、同じ課題に対して、「日本は、決してユニークではなく、単に他と違っている」だけだと述べた。彼は東アジア型資本主義の提唱者でもあるが、2に関しては、冷戦終了後のアジア経済の目覚ましい発展に注目する必要があるとし、超国家経済主義より地域経済主義の重要性を指摘した。

3については榊原によれば、富と権力の分離、参加型の組織内分権、メリットクラシーなどに基づく安定した行政組織からなる日本型システムが、日本の資本主義を支えているとする。吉田和男（京都大学経済学部）は、日本型システムを解明する上で、従来の要素還元主義は不適であり、要素間関係を分析する新しいパラダイムが必要だと述べた。4についてはあまり諸論が分散的になりすぎてしまったので省略する。

5については、ジョンソンは、ハンチントンの文明衝突説は、イデオロギー的、ご都合主義的で、歴史的分析が不十分であると厳しく批判した。梶田孝道は、現在世界で多発している民族紛争の解決のためには、「文明」と「文化」の概念を区別するとともに、両者間の機能的関係を考慮すべきだとした。

全体的な印象として残ったのは、このシンポジウムは、論点が拡散し過ぎて、議論を十分に深めることができなかったという点である。せっかく日本は「異質・特殊」かという刺激的テーマを掲げたのだから、もっと白熱した深みのある議論ができたと思えるのだが、そうはならなかった。

それは一つには、文化人類学・社会学と政治経済学という専門の異なる研究者間の対話の困難さゆえかもしれない。制度的構造を議論の出発点とする政治経済学と、制度の背後にある人間の行動の分析を中心にする学問との間にある深い溝を見る思いがした。

「後期江戸文化におけるエロスと性」（芳賀徹代表）というセッションでは15本もの報告があり（表4）、スリリングな討論が行われた。

このシンポジウムは、中国文学・日本文学・文化史・美術史・社会学・文化人類学などの研究者が、「江戸後期」という限定された時代の「エロスと性」について徹底的に学際的・国際的な討論を行ったところに、その特色を見ることができる。テーマがテーマだけにどのような議論になるか、心配したむきもあったが、「今までほとんど研究されてこなかった江戸時代後期の『エロス』や『性』について、春画などを使った研究発表も多かったが、少しも下品にならず、エレガントに自由に論じることができたのは、今回の大きな成果だと考える」（このシンポジウムを企画した芳賀徹氏の言葉）。

「日本」研究者でない研究者の日本研究

以上に紹介したのは「会議」のほんの一部分ではあるが、世界中から日本研究のプロたちが一堂に会し、日本のありとあらゆる側面を議論したのは実に壮観であった。もう一つ少々毛色の変わったシンポジウムの紹介をしておこう。アメリカの第一線の社会学者テリヤキヤンが企画し、ヘブライ大学のアイゼンシュタットなどが参加したもので、日本を社会理論の中にどう位置づけるかというものである。

テリヤキヤンの主張するところによれば、かつて社会学の理論に内在していた「よき社会」(Good Society) のイメージを、現代社会学は打ち出せないでいる。こういう観点から日本の社会を見ると、かつてデュルケームが『道徳教育論』で描いたような「よき社会」を日本のある部分は体現しているように思われると主張する。社会学者は、したがって、もっと日本研究をするべき時だというわけである。一方、長年にわたって近代化論の中心的人物であったアイゼンシュタットは、日本は西洋の理論的枠組みである「国家」対「社会」という構図では理解することができないと言う。日本は「弱い国家」対「強い社会」というフレームワークのもとに理解すべきである。このような社会には明確なビジョンがなく、したがって明確な革命も生じない。コントロールは強いが、それが決して専制に発展しないところに特色があると説く。

このような解釈がどれほど正しいものか、ここで論じる余裕はないが、彼らのように「日本」研究のプロではない研究者の日本解釈も、かつてに比べると本当にレベルが高くなってきたと思わざるをえないというのが私の感想である。

日本研究は日本研究者だけのものではないというのは、いまや常識に近いが、日本以外の社会を研究するために考案された「理論」が、はたしてどこまで日本の社会の現実にせまることができるのか、興味深い問題である。

今後、西洋の多くの社会科学者が、日本に関する理解を深め、日本の現実を前提として「理論」の発達を深めるようになったとき、従来の諸理論は大きく変化をとげ、その普遍性を徐々に拡大することになるであろう。

対話の場として

研究発表とならんで、「会議」の目的にかかげられていた「人的交流」については、「会議」はどのような成果を上げることができたであろうか。

私は1986年に、日文研設立構想の中間報告をたずさえてアメリカ・カナダを回ったのだが、そのとき面倒をみてもらった、アルバータ大学歴史学部のシン・ビン教授と会うことができたのが一番嬉しかった。アルバータ大学はカナダの最も北にある大都会エドモントンにあるが、8年前の11月に訪問したときには、すでに気温はマイナス12度だった。こんな北のはずれ（失礼！）にも日本研究をしている研究者がいると知って、胸が熱くなった記憶がある。

しかしこのような出会いは、むしろ例外で、地球は本当に狭くなったというのが実感である。日文研が創設されて、2～3度お目にかかる研究者の数は多い。しかもただ会うだけではなく、シンポジウムの発言などを通して、どこの誰それは「できる」とか、「私とは立場が違う」とか、「交流」に深みが出てくるのが、このような研究集会の一番の成果である。イデオロギーや研究

方法の違いなどさまざまであろうが、そのような違いを越えて対話が可能になれば、それが一番望ましい。そのためにはこのような会議が世界の各地で何度も開かれる必要があるだろう。

「会議」の最終プログラムで、スタンフォード大学のベフ教授は、日本研究の世界学会の提案をされた。この提案が今後どのような展開を見せるか不明だが、「世界学会」をつくりたいという願いが自然な勢いとしてでてきたのは、「日本研究・京都会議」の「人的交流」が、それなりにうまくいった証拠なのではなかろうか。

〔表〕

表1　国際公募によるシンポジウム

"The Emergence and Development of Anthropology in the Colonial World: East-West Parallels," Organizer Jan van BREMEN

"Japanese Creativity and Sustainable Development," Organizer KOIZUMI Tetsunori

"Past, Present and Future: Comparing the aesthetic value of snow in Japan and the US," Organizer Barbara SANDRISSER

「環太平洋 CJK 書誌情報ネットワーク・システムの構築に関する国際シンポジウム」

"Comparative Land Policy: The Role of the State and the Market in Determining the Use and Price of the Land," Organizer FUKAI N. Shigeko

"Resources for Japanese Studies in Europe," Organizer KOYAMA Noboru

"Japan's Way to Modernity: Dialectics of Intellectual Thought in the Tokugawa Era." Organizer Olof G. LIDIN

"Communication in Japanese-Foreign Contact Situations," Organizer J. V. NEUSTPNÝ

"Cultural Forms that Cross Boundaries: Japanese Arts in International Context," Organizer Earl MINER

"Changing Audiences and Constituencies," Organizer Samuel K. COLEMAN

"Japanese Studies and Research Resources in the United States," Organizer NIKI Kenji

"Enigmatic Experiences of Early Twentieth Century Japan: Wenceslau de Moraes, Abdürreşid Ibrahim, and Fukuhara Hachiro," Organizer Selçuk ESENBEL

"The Bearing of Social Theory on Japanese Studies: the Bearing of Japanese Studies on Social Theory," Organizer Edward A. TIRYAKIAN

表2　国際日本文化研究センターの共同研究を母体とするシンポジウム

「交渉行動様式の国際比較」(代表者　木村汎)

「後期江戸文化におけるエロスと性」(代表者　芳賀徹)

「日本は本当に異質・特殊か？—日本研究パラダイムの再検討」(代表者　濱口惠俊)

「日本の想像力」(代表者　中西進)

「徳川日本における人口抑制行動とその東アジア史的考察」(代表者　速水融)

表3　国際交流基金が組織したシンポジウム

「日本語教育／学習目的の多様化への対応」

「世界の日本研究／近年の研究動向と今後の発展のための課題」

表4　シンポジウム「後期江戸文化におけるエロスと性」(代表者　芳賀徹) での報告テーマ

"Packaging of Passion in Late Edo Gesaku" (IWASAKI Haruko)

「金瓶梅における愛の手管」(井波律子)

「浮世絵春画の内と外——操作されているのは誰か」(千野香織)

"Attributes in Shunga Illustrations/Suggestive Non-Shunga Illustrations" (Matthias FORRER)

「中国の春画と日本の春画」（河野元昭）
「春画史の時代区分」（浅野秀剛）
“Interminable Reflections” (Sumie JONES)
「エロチックな布」（田中優子）
「亀齢軒と『華月帳』——江戸末期の風流人」（中野三敏）
「江戸男色のサイン」（丹尾安典）
“Bodily Bawdily Giving Tongue: The Lingual Preasures of Gesaku” (Regine JOHNSON)
「春画と笑い」（早川聞多）
「性器崇拝と浮世絵春画」（辻惟雄）
「まねき猫と性崇拝」（井上章一）
「江戸の小唄におけるエロスと性」（山口昌男）

日本研究・京都会議

1994年10月17日～22日

1　登録風景（エントランス）

2　所長挨拶（講堂）

3　大江健三郎氏 公開講演（講堂）

4　マリウス・ジャンセン氏 公開講演（講堂）

5　大江健三郎氏 インタビュー

6　歓迎会 国際交流基金挨拶（京都東急ホテル）

7　歓迎会風景（京都東急ホテル）

8　セッション Room 1（第一共同研究室）

9　セッション Room 5（セミナー室1）

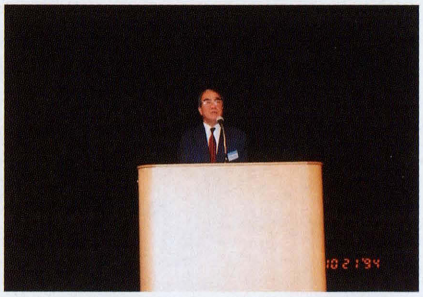
10　セッション Room 7（講堂）

11　昼食風景

12　雅楽演奏会（回廊の庭）

13　シンポジウム（講堂）

14　所長講演（講堂）



15　総括討議（講堂）

16　送別会（セミナー室）